第３１６回　令和８年１０月２６日（月）

「戦争を甘く見る空気について考える」

斎藤幸平さんの「人新世の黙示録」を読了して、すべてに賛同できるわけではなかったものの問題提起としてとても深く考えさせられる本でした。同じタイミングで山崎雅弘さんの「戦争を甘く見る空気」を読むとさらに考えさせられました。

今は戦争前夜の 1930 年代に似ているという主張ですが、確かに「人新世の黙示録」を含め、戦時体制であるとか戦争という言葉が簡単に使われるようになっている感覚はあります。戦後 50 年ごろまでは二度と戦争を起こさないという空気感が強く、戦争に結びつくワードを出すことすらできない時代だったように思います。

議論することは大切だと思います。どのような意見であっても議論する以前に封殺する社会は良くないと思うので今の状況を悪いとは思いません。ですが戦争を甘く見ることだけはあってはならないと強く思います。

日清戦争、日露戦争、日中全面戦争と日本が戦争熱で高揚している間、戦争は常に日本の外で起きていて、国民は新聞や報道映画などで勝ったことを聞かされていました。それでは戦争の悲惨さは伝わりません。

真珠湾攻撃が報道されたとき、多くの国民は雲が晴れたような高揚感に包まれました。しかし翌年から戦争の本当の恐ろしさを実感することになります。終戦までわずか４年間ですが、このときの強烈なトラウマが日本人の心に強く刻まれました。

現在のガザ地区攻撃、イラン戦争、ロシア・ウクライナ戦争はすべて画像を通して見るだけで、日本国内は物価が上がることはありますが戦場になることはありません。それぞれの正義感によって戦争が肯定されることは絶対に避けてほしいと思います。

これからの戦争はドローンやロボットが使用されることが多くなり、直接相手を攻撃することや自分の身が危険にさらされることが少なくなります。小さいころからゲームをやっている子どもが大人になり、同じようにモニターを見ながら戦争をする時代になります。当然戦争へのハードルははるかに低くなります。

歴史的に戦勝国となっている国には戦争に対するトラウマがありません。むしろ戦争をすれば国が豊かになり景気が良くなると考える人間もいるでしょう。戦争の悲惨さを知っている日本人の果たす役割は非常に大きいのですが、戦後 81 年経って人々の考え方が転換することが心配です。語り継ぐことの大切さを忘れてはなりません。